令和４年度の振り返りと今後の課題

○新型コロナウイルス感染拡大防止対策

・昨年度と同様に、あそび場は12時から14時を室内消毒のため閉所（やくも子育て支援センターは開所時間が 14 時までのため、閉所なし）し、日々の消毒が不可能な玩具（布製品等）、密となりやすい大型遊具、食事コーナーの撤去、床面積に応じた利用可能人数の掲示などの対策を行った。また、土・日・祝日は定員を設けた予約制で開所した。

・つどいや講座等は、月１回に回数を減らす、時間を１時間から30分程度に短縮、定員を設け予約制とする、検温の実施、保護者にマスク着用のお願いをする、可能な施設は会場をあそび場と分け広さを確保するなどの対策をとった。また、利用者同士のふれあいやフリートークなどはやめ、親子のふれあいを中心とした内容に変更して実施した。

・ボランティアの方との協働や世代間交流はすべて中止とし、講座等実施の際の託児も中止とした。

・市内の感染拡大状況に応じて、令和4年3月25日～4 月 7 日（春休み期間）、4 月 23 日～5 月 8 日（ゴールデンウィーク期間）、7 月 8 日～8 月 31 日（夏休み期間）、すべての施設を閉所し、その間の「つどい」や「講座」等も中止、または延期とした。

○日々の相談事業

・新型コロナウイルス感染拡大防止対策のための閉所期間中も、おっぱい相談・子育てお悩み相談などの個別相談は中止せず、感染症対策のとれる部屋で実施した。移動自粛や在宅勤務など生活環境の変化に対するストレスや孤立感から子どもに対するイライラやストレス、不安を抱える方の相談が多くあった。

・地区公民館で行われるわいわいサロン（乳幼児健康相談）が中止、または予約定員制となり、おっぱい相談で哺乳量についての相談や体重測定を希望される方が増えた。

・内容が多岐にわたる相談を土曜、日曜、祝日に受けることもあり、専門機関等の情報の収集、整理、共有に努めていく。

・今後も保護者の不安を軽減するよう、しっかり話を聞き、保護者の気持ちに寄り添いながら必要に応じて専門機関や地域の保健師など、関連機関につなげていく。

あいあい

○妊娠期から子育て期までの切れ目のない支援の構築

・平成29年6月より、地域子育て支援拠点事業を担当する家庭支援係と、母子保健事業を担当する子育て保健係の2係が松江市子育て支援センターとなった。その事により、妊娠期から子育て期にわたる一体的かつ切れ目のない支援を提供する体制ができた。

・子育て世代包括支援センター事業として、母子保健コーディネーターと保育士、保健師、管理栄養士や関係機関が連携して、母子の健康や子どもの発育・発達支援、保育所入所など多岐にわたる相談・支援をワンストップで総合的に支援するよう努めた。

○利用者支援事業

・令和３年２月より子育て支援に関する情報提供と、子育てに関する相談等個別支援を行う利用者支援事業を開始した。今年度は、市のホームページや子育て支援ツイッターを活用し、より分かりやすくタイムリーな情報提供を行い、子育て家庭が地域の社会資源とつながりやすくなるよう努めた。今後も、利用者主体でより適切な支援活動が行えるよう、利用者支援専門員としての専門性を身につけていきたい。

○交流事業・子育て学習会

・コロナ禍で定員制としていた「0 歳を第 1 子にもつ親と子のつどい」は、予約開始とともにすぐに予約が埋まってしまっていたため、令和 3 年 10 月から 2 回に回数を増やした。それでも今年度、後半にかけて予約が取りづらい状況が続いている。感染症対策を講じた上で、再度回数や定員数の検討、内容の見直し等を行い、利用者のニーズに合った交流の場

の提供を行っていきたい。

・「子育て学習会」では、保護者同士の交流がしたい、とのアンケート結果を踏まえ、そのような内容を企画したが参加者は少なく、専門的な知識を学ぶ内容の方が人気であった。講師を招いての交流活動はなかなか参加しにくいと感じる保護者が多い。誰でも参加しやすく、その後の交流につながるような企画も考えていきたい。

〇保育所（園）の入所受付業務実施

・平成29年11月から保育所入所の説明及び受付事務を始めている。乳幼児健診で保健福祉総合センターに来所した際に保育所（園）への入所の相談をする保護者が多い。

・母子手帳交付時に母子保健コーディネーターが面談する中で、【産休時の上の子どもの保育所について】【育休明けに保育所に入るには、いつ頃手続きをするのか】等保育所入所に関する質問が多く見受けられた。

保育所（園）の空き状況の情報提供、手続きの方法
一人ひとりに寄り添った相談対応
保育所以外の子育て支援サービス情報提供（訪問型子育てサポート事業、ファミリーサポートセンター事業、民間団体等）

上記の内容について、個別に相談に応じながら対応にあたった。

おもちゃの広場

〇事業全体の評価と今後の課題

・前年度末から新型コロナウイルス感染拡大に伴い、子育て家族の罹患も多く自粛要請等で休所日が長引いたこともあり、利用状況は昨年度より２割減少した。平均すると１日に11組の利用で、年齢別にすると、0、1、2歳80%、3歳以上20%であった。

・乳児の初来所が増え、遊具の配置やおもちゃの内容などの環境構成に配慮した（本棚、赤ちゃん用すべり台、クッションマットなどを設置）。親子が安心して過ごせるよう居心地の良い雰囲気を作り、利用者の声を聞きながら親しみやすい空間を提供することで、在宅の低年齢を育てる母親の利用が増えている。

・3密を回避した親子での遊びから、徐々に親子同士での関わりや、つながりを求める傾向に変わりつつある。同郷などの共通の話題から顔見知りが増え、仲良くなった母親同士が SNS でつながり支え合う姿も見られた。

・移動制限が解除されたことにより、里帰りや祖父母との交流が戻りつつある。また、父親の育児休業が話題に上がる中、第２子出産後の父親の育児参加に助けられたとの声もあった。母親が育児を一人で抱え込むことのないように協力する家族の姿がみられ、父親自身も我が子とのふれあいを楽しんでいる姿がうかがえた。

・土曜・日曜・祝日の利用は、予約制限がある中で、家族との遊び場として利用されリピーターも多い。平日に比べ休日は、子どもの年齢差が大きく、異なる年齢の子どもが同じ空間で交流するため、発達に応じた遊具の配置や、安全に利用できるよう制限解除後もさらに配慮が必要と思われる。

・平日は第一子を育てる母親の利用が多く、子どもとの関わり方に不安を感じる母親が見られた。育児の悩みや不安に寄り添いながら、発達に応じたふれあい方を伝えるなど、必要な関係機関につないでいる。また、転勤で慣れない土地での子育ての不安や仕事、家事などの悩みから、子育て支援事業の照会が増えている。ワンオペ育児など母親が負担する精神的な苦痛やストレスなどの解消となるよう母親の悩みを受けとめ、自己解決に繋がるような支えを心がけている。今後も引き続き親子の孤立化を防ぎ、子育ての不安感や負担感の軽減、解消となるよう伴走型の支援に努めたい。

・「広場のつどい」や「子育て&子育て支援のための講座」では、市民活動センター内の音楽関連のコンサートや市立図書館の読み聞かせなどの協力もあり実施することができた。また、館内のイベント開催に伴い国際交流や各イベントなどの関係者の利用も増えてきている。コロナ禍の制限が解除されることに伴い、親子同士のかかわりが広がるように、各関係機関と連携を深めながら、交流事業などの充実も図りたい。

美保関子育て支援センター

〇事業全体の評価と今後の課題

・前年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策として、子育て支援センター内での利用人数制限を設けての開催となった。制限を超える利用者があった場合は、大会議室などを遊び場としながら、安心して遊べる場所の提供を行った。

・相談内容としては、保育所・幼稚園入所に伴った内容や、入所中の子どもの心配事などの相談が1.7倍に増えた。小学校区内に幼稚園のない地域の子どもの、幼稚園入園についての問い合わせや相談があり、個別に対応する内容も多くあったため、関係機関と連携を取りながら、対応した。また、保育所や幼稚園に向けての家庭保育協力に合わせての子育て支援センター閉所中には、「家庭保育協力」に対する不満や苦情、子育てしていく中での不安・心配事を抱えた保護者の気持ちに寄り添いながら話を聴いた。保育所入所申請をしているが、なかなか入所できない待機児童の子どもを連れた親子の来所が続き、相談などの件数増加につながったと思われる。その他、身体的な相談が去年の 3 倍に増えた。目立った理由はわからないが、いつでも身体測定が出来たり、保健師が近くにいたりすることで、些細なことでも相談しやすい環境であるとこが増加につながっているのではないかと考える。

・普段の遊びの中で、いろいろな動きができ、無理なく子どもの成長発達につながるよう、定期的に子育て支援センター内の環境設定を変化させたり保護者に声をかけたりしたことで、保護者に子どもの成長に気付いてもらうきっかけとなった。また、子どもの成長発達から、危険につながる事例など伝えることで、子どもを取り巻く環境について考えてもらう機会にしてもらうようにした。

・月ごとに内容の変わる自由製作には、保護者からの要望が多かった、家庭で経験しにくい絵の具やスタンプを用いた遊びを多く取り入れた。感触遊びを一緒に楽しんだり、子どもの成長を感じたりすることのできる時間になったようだ。

・地域の方の協力のもと、美保関支所横にある畑でさつまいもの収穫体験を行うことができた。子どもだけでなく、収穫初体験の保護者もおり貴重な経験となった。今後もボランティアの協力を得ながら、地域との連携がなければできないような事業も計画していきたい

たまゆつどいの広場

〇事業全体の評価と今後の課題

・今年度も新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、利用時間制限や食事室の利用停止、遊び場及びイベントでの人数制限を行った。市内の感染状況により、春休み、夏休みといった利用者が増加すると予想される時期に子育て支援センターが閉所された為、遊び場が拠り所となっていた利用者にとって長期間大きな不安感が募ったようだった。
今年度の利用者の年齢区分は、0歳、1歳が利用者の大半で2歳、3歳、4歳の利用者は昨年度よりもかなり減った。0歳と1歳の人数はほぼ同じであった。

・主な利用者は、0 歳児を育てる育児休業中の方や 1 歳になって保育園への途中入園を希望している親子の利用が目立った。玉湯町内には、保育園が3園あるが、少ない募集枠に希望者が集中したり、全く募集が無い月も多かったりし、町内の保育園に入れたいと考える保護者の希望はかなわない事が多かった。

・玉湯町の人口は平成17年から増加傾向にあり、若い子育て世代の人口が増え、出生数も年間80人～90人程度。他地区に比べると多いことは喜ばしいことである。しかし毎月保育園入園申請を出すが、今月も入れなかったという利用者からの声が多く聞かれた。育児休業を延長し4月入園に期待しているが大丈夫かと大きな不安を抱えている保護者が多い。不安な気持ちに寄り添い、一時預かり事業やファミサポ等の事業について丁寧に説明を行った。

・昨年度に引き続き職員が「わいわいサロン」「たまゆ健康相談」に出向き保護者に直接声をかけ、遊び場を紹介した事がきっかけとなり利用する親子も増えた。コロナ禍で外出を控えていた親子にも安心して遊びに行ける場所であるという事を伝え、子育ての思いを共有することで利用へ結び付いたと考える。今後も公民館事業や保健師との連携をとり安心して地域で子育てが出来る体勢を整えていきたいと考えている。

・今年度は、「あそびにおいで！」を0歳児対象、1歳以上児対象、全年齢対象と内容を分けて行ったが、0歳と1歳の母との交流の機会を考え来年度は対象を分けずに開催することを考えている。
・子育てボランティアに登録されている方は、「布のおもちゃ作り」ボランティア講習会以外には携わってもらう機会がなかった。年齢や体調などの理由で次年度の登録者は4名減となってしまったが、おはなしのじかん「コスモス」さんが4名登録され、前年度と同人数になった。地域に根差した子育て支援センターとなるよう、今後も地域の方の協力を得ながら運営していきたい。
・コロナ禍も4年目を迎え、少しずつ制限が緩和されつつあり利用者同士の交流も再開してきている。職員も利用者の状況を見ながら必要に応じて声かけを行い、親近感や信頼感を抱いてもらえるよう努めていきたい。

宍道子育て支援センター

○事業全体の評価と今後の課題

・新型コロナウイルスの感染拡大が始まった年から相談件数が徐々に増加しており、今年度は、コロナ感染拡大前（H30年度）に比べ相談件数が約2.8倍となった。（H30年度107件、今年度331件）。また、最近では大人自身の悩みによる相談が増加傾向にあり今年度はコロナ感染拡大前に比べ5倍近くになった（H30年度9件、今年度43件）。交流制限など親同士の交流の場、出会いの場が減少していることや、長引くコロナ禍で親自身も不安や不満が溜まり、精神的にも余裕がなくなっている事が要因のひとつと考えられる。子育て支援センターの役割として、親子の孤立を防ぎ、誰でも安心して利用できる場、相談しやすい環境作りを心がけていきたい。
・毎年2月は天候や体調不良で来所者が減少するが、今年度は105組、一日平均約6組（昨年度2月70組、平均4組）と昨年度より1.5倍多く、また、3月は121組と、今年度で一番来所者が多かった。保育所の入所に関する相談で来所される方が増えたことや、コロナ感染者が減少傾向にあり出かけやすくなったことなどが増加につながったと考えられる。
・昨年度はつどい、講座共に予約開始直後に定員に達することもあったが、今年度はすぐに定員に達することも無く、特につどいの参加者は昨年度に比べ減少した（つどいの平均：昨年度9組、今年度6組）。つどいの日に合わせてあそび場を利用される方も多く、自由に遊びたい親子が増えているように感じた。

東出雲子育て支援センター

○事業全体の評価と今後の課題

・東出雲複合施設建設に伴い、令和4年6月より仮移転して支援センターを開所した。移転当初は慣れない場所で戸惑うこともあったが、試行錯誤しながら環境整備や事業を進めていく中で、来所者の交流の場を提供できるようになった。令和5年6月には複合施設が完成し、再度移転となるが、子育て中の親子が気軽に自由に利用できる場を目指して施設運営を行っていきたい。
・今年度の子どもの利用者は0歳児が40%、1歳児が44%、2歳児が9%、3歳以上が7%であった。利用の大半が0歳児と1歳児であり、遊び場の雰囲気や設置してあるおもちゃ等、物的環境がある程度整っており、来所者にとって利用しやすい場であったことが理由として考えられる。子どもにとって環境はとても大切なので、おもちゃの種類や配置を考え、破損した物はないか確認し、消毒等もこまめに行いながら、環境構成を考えていきたい。
・育児休業中の保護者が多く、保育所入所についての相談が多くあった。保育所入所についての書類等が年度ごとに変わるため、内容を十分に把握し、保護者の相談にのりながら的確な助言ができるよう努めていきたい。
・保護者との会話の中で悩みを打ち明けられることがあり、内容によっては保健師に繋げて対応してもらい、保護者の育児不安やストレスの解消に向けて連携している。
・子育て家庭の孤立が増える中、今後も子育て家庭のサポートを行い、様々な交流の場を設けながら保護者に寄り添った支援を行っていきたい。

鹿島子育て支援センター

〇事業全体の評価と今後の課題

・市内において新型コロナウイルス感染者の増加が続いた現状を受け、休所となった期間があり、開所日数が昨年度より 67 日減の 232 日だった。感染拡大防止対策として定員を設け人数を制限し、利用者の安全を最優先にした事もあり、利用者数は、前年度比 35%（2,554 人）減の 4,796 人となった。

・これまで 1 歳児の利用割合が一番多かったが、今年度初めて 0 歳児の利用がそれを上回り、低年齢化の傾向が伺えた。母親の早い段階での仕事再開が大きな要因と考えられる。0 歳児の貴重な育児期間に、母親が不安なく充実した子育てが出来るよう支えていきたいと職員一同心を込めた支援に努めた。

・充実した遊び場の工夫として、遊びの広がりに繋がるよう意識し、ひと月毎に玩具の交換を行った。新たな環境の中、繰り返し来所する親子が増えた。

・利用親子の地区割では法吉からの利用が大きく割合を伸ばした（26%→36%）。鹿島も増え（13%→16%）、町内の公民館、支所保健師の協力を得て、地域と連携出来た結果として嬉しく受け止めている。

・9 月以降、少しずつ事業を再開したが、以前のような、予約が殺到し短時間で定員が埋まるという状況にはならなくなった。予約枠に空きがあり声掛けをすると参加に繋がり、人数は揃うが、意欲や自主性があまり感じられない現状である。事業の実施数や内容の工夫、予約の取り方など今後の検討課題としたい。

・親子サークルは、少ないメンバーではあったが職員も加わり一緒に盛り上げ支えてきたが、年度途中での転勤や引っ越し、保育所入所でメンバーがいなくなり、12 月で区切りをつけ休会とした。新たなメンバーでの再開に向け努力していきたい。

・市立図書館の移動図書館車と連携を図り、本の貸し出しに力を入れてきた。利用者も増え、親子読書の推進に繋がり成果が出ている。

・鹿島子育て支援センターの特色である世代間交流（高齢者施設との交流）が、コロナの流行とともに実施出来ずにいる。核家族化が進む現代において、このような世代間交流は大切であると考えている。一日も早くコロナが終息し、再開できよう準備をしていきたい。

やくも子育て支援センター

〇事業全体の評価と今後の課題

・今年度も感染症対策を行いながら開所をした。人数制限を設けており、今まで10人としていたが、今年度の 9 月に見直しを行い、あそび場の面積に対しての人数で 18 人にすることにした。定員に達することはほとんどなく、親子でゆったりと遊んでもらえた。事業の定員は 16 人にした。以前より、にぎやかに事業を行え、喜んでもらえた。

・地域別では、八雲、乃木方面からの来所が多いが、橋北方面からの来所も多かった。

・今年度初めて、「プレママごはん教室」という名前で、妊婦を対象とした事業を開催した。1 年間で 4 回の開催を予定していたが 2 回は参加者がおらず、残念ながら中止とした。コロナ禍で、妊婦が出かけにくいことの他にも、出産前から約 5 か月後に始まる離乳食のことまで気持ちが向かないのではないかとの反省点が残った。しかし、来所の親子と関わる中で子育て支援センターの存在を知らず相談する相手がいなくて不安だったなどの声を聞くことがある。妊娠期の頃からつながりを持ち、困ったことがあれば利用してもらえる場になるよう、来年度も管理栄養士の先生や地区の保健師と連携を取って、現在妊娠中の方や子育て中の父親、母親のニーズをしっかりとつかんで、事業を開催していきたい。

・コロナ禍で、交流する場などが減っているが、子育て支援センターで顔なじみになった親子が増え、声を掛け合って遊んでいた。少し月齢の高い子の真似をする姿や、子どもたちが一緒に遊ぶ姿など、家庭で遊んでいる時には見られない同年齢の子ども同士の関わる様子を見て、保護者も喜んでいた。保護者同士やスタッフとも、話をしたり悩みなどを相談したりしやすい雰囲気を作るように、今後も努めていきたい。

・お話の日、野いちごタイムの日以外でも同じ法人内の保育園に近いという特色を生かして、保育園で人気の手遊びや絵本、ふれあい遊びなどを紹介した。季節に合ったペープサートなどもすると、歌に合わせて体を揺らす子もおり、「保育園に入ったら、お友達と一緒にこんな感じで絵本やペープサートを見るんだろうな」と、入園してからの姿を想像して、微笑む母親たちもいた。育児の不安や悩みを相談するだけでなく、一緒に子どもたちの成長を喜び合えるような関わりを今後もしていきたい。

育児サロン（松江赤十字乳児院）

〇事業全体の評価と今後の課題

・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今年度は4月から2月まで閉所とした。情報誌やホームページ、公式LINEにてつどいや講習会の予定を掲載していたため、それについての問い合わせが多かった。その中で、開所・閉所が分かりにくいという意見もあり、掲載方法を検討し、改善した。

・昨年に引き続き、感染対策のため、設備の整備や備品の購入などを行った。今年度は、地域交流スペースの抗菌仕様クロスへの張り替えや手洗い場の水栓を非接触型への取り替え、スペースを区切れるようベビーサークルの購入など、充分な感染防止対策を行った上での開所が出来るようより良い環境作りに努めた。

・親子のつどい、講習会は、コロナ感染拡大防止のため年間を通して中止とした。

・ベビーマッサージは、オンラインでのみ行い、3組の希望があった。経験者の方、初めての方、どちらも落ち着いた雰囲気で行うことが出来た。子どもの機嫌が悪く、途中で中断になったケースもあったが、日を改め実施し、機嫌の良い状態での体験もしてもらうなど臨機応変に対応できた。

・育児相談は、授乳に関することや子どもとのかかわりについての相談が多かった。またオンラインでの食育相談も4件行った。実際に子どもが食べている姿を見ながら相談に応じることができ、利用者からは「色々聞くことができてよかった」という声があった。相談事業は、必要に応じて、看護師、栄養士など、各専門職と連携しながら応じた。

・オンラインで実施している事業（ベビーマッサージ、食育相談）は、利用者が少なかったように感じる。今後も、情報誌やHP、LINEを通して周知を積極的に行っていきたい。